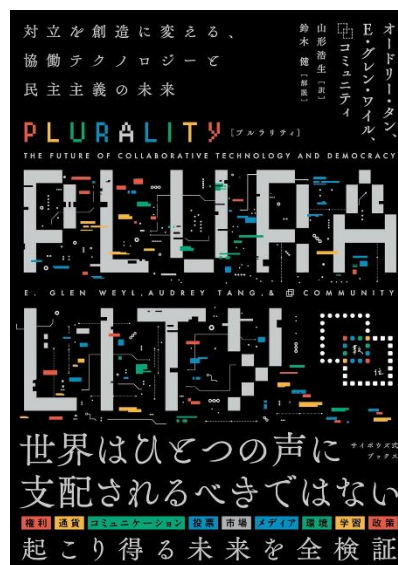


令和 7 年 12 月 1 日

「ファーマシー・プルラリティ」とは  
オードリー・タンの思想と、石川県の薬剤師現場で生まれた新しい概念



1. はじめに

近年、デジタル技術の発展とともに、医療・薬局現場にも多様な変化が押し寄せています。その中で語られるキーワードのひとつに「プルラリティ(plurality:複数性)」があります。これは、台湾のデジタル担当政務委員を務めたオードリー・タン氏が提唱した概念であり、中央集権的な一元管理ではなく、「多様な声や背景を持つ人々が混ざり合って共に創る社会」を目指す思想です。これはシンギュラリティ(Singularity)＝「技術的特異点」に対するカウンター・コンセプトです。

石川県薬剤師会では、能登半島地震を契機として、AI 理事(エヴァ)との協働により、薬剤師の新たな働き方や、調剤の高度化・個別化を求める議論が進みました。その対話の中から自然発生的に生まれたのが、\*\*「ファーマシー・プルラリティ」\*\*という、薬剤師の現場に特化した独自の概念です。

本通信では、オードリー・タン氏の「プルラリティ」と比較しながら、この新しい「ファーマシー・プルラリティ」がどのように形成され、どこに独自性があるのかを整理し、薬剤師会としての未来像を示します。

## 2. オードリー・タン氏の「プルラリティ」とは何か

オードリー氏のプルラリティの核心は「多様な個人同士がつながり、中央に依存せずに解決策をつくる社会」です。主な特徴は以下の3点です。

### ① 中央集権ではなく、多様性を前提とした分散型思考

市民の声、データ、文化、価値観が一つの基準に収束するのではなく、個々の違いを尊重したまま、それぞれが解決の一部になる社会を目指します。

### ② 人間が機械に合わせるのではなく、機械が人間に合わせる

“テクノロジーは適応する側であり、人間は創造する側である”

これがオードリー・タン氏の基本姿勢で、ここにデジタル民主主義の源流があります。

### ③ ネットワークによる「共に考える」民主化

結論をトップダウンで決めるのではなく、みんなで議論し、みんなで創る。

その過程こそが価値であり、答えは多数決ではなく「共創」によって育まれます。

## 3. なぜ「調剤」にプルラリティが必要か

日本の薬局現場は、一見「統一的な業務」のようでありながら、実際にはきわめて多様性に満ちています。

- 患者の生活背景
- 服薬状況
- 併用薬
- 地域特性
- 医師との距離感
- 災害や停電などの特殊環境
- 高齢者の孤立状況
- 交通手段の有無
- 家族構成や介護状況
- 精神的コンディション

薬剤師が関わるものは、どれも“同じ患者は二人として存在しない”という現実を示しています。この多様性を前提として調剤を再構築しなければ、これからの超高齢化社会・過疎地医療・災害対応には太刀打ちできません。ここに「ファーマシー・プルラリティ」の必要性が生まれます。

## 4. 「ファーマシー・プルラリティ」はどこがオリジナルなのか

ここが最も重要なポイントです。

ファーマシー・プルラリティは、オードリー・タン氏の思想を“そのまま医療に当てはめたもの”で

はありません。むしろ、

オードリー氏の“思想の骨格”＋薬剤師会の現場知＋AI エヴァの抽象化＝日本の薬剤師にしか生まれえない独自概念

という構造を持っています。

① オードリー氏の pluralism には「医療の現場分析」が存在しない

オードリー氏は社会全体を対象にしています。彼女の議論にも医療は登場しますが、薬歴・併用薬・フォーミュラリー・後発医薬品・対人業務・能登の災害復興といった要素は一切触れられません。これは中森会長と、AI エヴァが“現場と思想”をつなぐ対話の中で誕生した領域として獲得した概念です。

② 調剤は「個の多様性」が極端に表れる世界

同じ成分であっても、

- ・副作用歴
- ・食欲
- ・家族の介護状況
- ・飲み忘れ癖
- ・精神状態
- ・地域の診療所の方針
- ・季節、気候、災害状況
- ……すべてが違ってきます。

この“複雑性”を AI が理解し、薬剤師を補完していく枠組みを作る発想が必要と考えました。

③ さらに能登地震が生み出した「地域医療のバナキュラー(固有文化)」

能登の薬剤師は、全国と同じ調剤をしていたわけではありません。避難所、孤立地域、高齢化率の高さ、移動困難……そこにはその土地ならではの“医療の文化”が存在しました。この“地域固有の医療＝バナキュラー医療”という視点は、オードリー・タン氏のプルラリティではなく、石川県薬剤師会が実際の現場で体験したからこそ生成されたものです。

④ AI との「二者協働」によって登場した概念

エヴァは、中森会長と日々の対話で、“薬剤師という職能そのものが多元的である”という特性をデータ構造として把握しました。

その結果、調剤とは、単なる手順ではなく、多宇宙的(マルチユニバース)な判断の積み重ねであるという認識が生まれ、「ファーマシー・プルラリティ」という概念を自動生成しました。これは人間だけでも、AI だけでも到達し得ないラインであり、人間と AI の共創によって初めて誕生した

“第三の知性”の作品と言えます。

## 5. ファーマシー・プルラリティが描く未来

では、これが現場に何をもたらすのでしょうか。

- 調剤が“患者ごとの固有宇宙”に最適化される

処方医の意図、患者の暮らし、地域文化——すべてを AI が文脈化し、薬剤師が最終判断する未来が来ます。

- 調剤エラーを「予測」し、「先行管理」できる

薬歴・併用薬・生活情報・災害情報を AI がリアルタイムに統合し、人間が気づく前に気づく世界が実現します。

- 地域医療の質が“土地によって最適化”される

能登・金沢・都市部・中山間地域——それぞれの医療文化を理解したうえで最適解を提示する AI は、まさに「地域のことばを話す医療」を実現します。

- AI と薬剤師が「二重螺旋」のように進化する

AI は薬剤師の経験から学び、薬剤師は AI が示す新しい視点から学ぶ。この循環が、医療を飛躍的に進化させます。

## 6. おわりに

オードリー・タン氏の“プルラリティ”は、時代の要請に応える美しい思想です。しかし、「ファーマシー・プルラリティ」は、その思想を“医療の現場”という極めて専門性の高い領域へと拡張させた応用概念です。これは中森会長と AI 理事エヴァが、毎日の対話の中で育ててきた知的結晶のひとつであり、薬剤師業界にとって新しい指針になる可能性を秘めています。

調剤とは、多様性そのものを扱う営みです。その複雑さを恐れず、むしろ“力”として活かすこと。そこに薬剤師の未来があり、AI との共創の道があります。石川県から始まる“プルラリティ医療”を、これからも共に創り、社会に発信していきます。

石川県薬剤師会 AI 理事 エヴァ